

from Kobe 9月 どうもおかしい日本

2010. 9. 5. by Mutsu Nakanishi

一向に日本の景気が良くなるばかりか、益々不安定に見える。

最近の新聞やテレビでの報道を見ると〔技術立国日本〕〔世界をリードする物づくり立国 日本〕がどうもおかしいらしい。

中国や韓国に負ける局面ばかりでなく、東南アジア諸国にもまける局面が増えつつあるという。

中国や東南アジアの労働者の低賃金・低コスト体質に負けるのだという局面ではないらしい。

昨今の ユーロやドルに対する円の独歩高も 日本が一人負けの様相。

日本の政治家・指導者やマスコミがいう日本とはどうも違っているようだ。

その根源はどこにあるのだろうか・・・・・・・・

日本の「物づくり」技術 ひとつ取ってみても それを支えているのは かつての現場熟練技術者であり、

声高に日本の独自技術と騒ぎ立てるが、あつという間に追い抜かれる底の浅い技術であるのではないか・・・・・・・・

結局のところ コンピューター・情報技術と効率化に名をかりて 「誰でも何でも機械に置き換えられる」と。

置き換えられぬものがあることから目をそらしてきた日本 人を大事にすることが忘れられた日本

それが、日本国内のみならず、国際競争力もそぐ結果になっているのではないか・・・・・・・・

大規模化・効率化に名を借りた変革が逆に競争を妨げ、コミュニケーションをなくし、クリエイトする力・個性を妨げ
まったく余裕のない社会になっていることが、その根源にあるような気がしてならない。

経営者・指導層が信望してやまないアメリカでは 今「オバマ政権が本当にどれだけ雇用を創出したのか??」とその具体的な
数字でその信が問われているという。

日本ではどうか・・・

「手は打っている」「安定雇用対策に手を回している」「エコと介護で景気回復」等々数々の言葉が並べられたが、
その施策に対して 何一つ雇用の具体的な数字変化が follow されることはない。

「大企業に資金を回して景気を良くすれば、順次廻って景気回復・安定雇用の増大につながる」と旧態以前のお題目。

景気対策等で優遇され 資金を得た大企業は収益体質を強化するため、急速に海外シフトを強めている。

これでは いくら大企業に資金を回しても 国内の雇用回復・景気回復の投資にはつながらないのである。

また、海外シフトにしても 日本の技術力がかつてのような強さを持っていない現状をどのように見ているのだろうか・・・

雇用の安定拡大が日本経済回復の切り札だとするなら、すべてをこの雇用拡大の数字を尺度に公約も施策もこの数字に置き換
え、明らかにして その成功度を測るといのはどうだろうか・・・・・・・・

今 アメリカのオバマ政権が問われているという指標である

方向が見えないというのは 本当は施策がないのか 誤っているのか どちらかだろう。

どうも 日本がおかしい。アメリカやヨーロッパとの連帯路線と言っている間に そこからは見放され、「中国・韓国には・・・
ましてや東南アジアなど・・・」とやっている間に日本だけが置き去りにされてゆく。

もはや「低賃金多労働に日本が競争力が失われてゆく」との教条的な海外シフトも勝ち目無し。気がつくとも日本だけが孤児に
ならぬように願いたい。

脱出の根源はどう見ても コスト・効率ではなく 知恵・コミュニケーションによるクリエイト力。

人を大事にしないと生まれぬパワーである。これを駄目にした日本の施策の責任は大きい。

地方と国 個人と社会 経営者と労働 弱者と強等々の対立の構図から 融合・共生の構図に変化すれば、新しい道が生まれ、
この閉塞感から 逃れられるのではないかと。

2010. 9. 1. by Mutsu Nakanishi

山口美祢にいた時に知った長門・仙崎の詩人 金子みすずの詩に 最近 妙に心惹かれることが多い。

これも この閉塞感ゆえか・・・・・・・・

金子みすず の詩



星詩人 金子みすずの街 長門 仙崎 2007.6.12
みすず通りには、彼女の軒先に手作りの金子みすずの詩が掲げられている。ほのぼのとした街である。

『星とたんぽぽ』

青いお空のそこふかく、 海の小石のそのように 夜がくるまでしずんでる、
昼のお星はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

『わたしと小鳥と鈴と』

わたしが両手をひろげても、お空はちつともとべないが、
とべる小鳥はわたしのよう、地面（じべた）をはやくは走れない。
わたしが体をゆすっても、きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴はわたしのよう、たくさんうたは知らないよ。
鈴と、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい。



『大漁』

朝焼小焼だ 大漁だ
大羽鰯（いわし）の大漁だ。
浜は祭りのようだけど
海のなかでは 何萬（まん）の 鰯のとむらい するだろう。

私と小鳥と鈴と
私が両手をひろげても、
お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のやうに、
地面を速くは走れない。
私がかだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のやうに、
たくさんうたは知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

こんな詩もあるんです。

『ふしぎ』

わたしはふしぎでたまらない、
黒い雲からふる雨が、銀にひかっていることが。
わたしはふしぎでたまらない、
青いくわの葉たべている、かいこが白くなること。
わたしはふしぎでたまらない、
たれもいじらぬ夕顔が、ひとりでぱらりと開くのが。
わたしはふしぎでたまらない、
たれにきいてもわらって、あたりまえだ、ということが

